学位論文の要約

論文題目「尾崎翠研究――〈読むこと〉と〈書くこと〉、後期連作を中心に――」

申請者　山根直子

本論文は、大正末期から昭和初期にかけて活躍した小説家、尾崎翠（一八九六～一九七一）の後期作品「第七官界彷徨」（『文学党員』一九三一年二月―三月、『新興芸術研究』一九三一年六月）、「歩行」（『家庭』一九三一年九月）、「こほろぎ嬢」（『火の鳥』一九三二年七月）、「地下室アントンの一夜」（『新科学的文芸』一九三二年八月）の分析を通して、翠における〈読むこと〉と〈書くこと〉の可能性、そして「私」のあり方について考察するものである。

第一章では、「第七官界彷徨」で描かれる「蘚の恋」と「人間の恋」について考察した。まず、先行研究を踏まえつつ、作中の「蘚」が雌雄同株（両性具有）の自家受精によって繁殖するマルダイゴケであることを特定し、「蘚の恋」は自分自身の異性の部分に恋をする「両性具有の恋」であることを指摘した。「両性具有の恋」は「こほろぎ嬢」における心理的両性具有の詩人しやあぷと、彼の女性の「分心」（「分身」をもじった翠の造語。身体ではなく、心が二つ以上に分裂した状態を言う）である、まくろおどとの恋にも当てはまる。自分自身に恋をする「両性具有の恋」は、他者を必要とせず、自己完結している。これは、本作で「蘚の恋」と並行して描かれた「人間の恋」の片思いによる失恋にも共通する特徴である。翠が本作でこのような自己完結型の恋愛を描いた背景には、先行研究で指摘されてきた家父長制社会に取り込まれることへの拒絶の他に、フロイトの昇華理論の影響が考えられる。「失恋」及び、肉体を持たない「分心」に恋をする人間における「両性具有の恋」は、結婚・出産に繋がらず、芸術を創造する「昇華」のために必要なエネルギーを損なう恐れのない恋である。作中で「人間の恋」は全て失恋に終わり、「蘚の恋」は次々と成就するが、これは「失恋」と「両性具有の恋」こそ、女詩人を目指す町子にとって理想の恋であることを象徴していると考えられる。

第二章では、本作の冒頭と末尾に掲げられる、「私」（町子）が青年詩人土田九作から教わった詩の解釈を再考した。上記の詩は、想い人を忘れられず、悲しく苦しい時には「風」とともに歩くことを推奨する内容である。従来、この詩が推奨する歩行は通常の〈身体の歩行〉であると解されてきたが、本章ではそれだけではなく、当時、翠が考案していた「心の道草」（「花束」）や、「眼」の「散歩」（「詩人の靴」）、「脚のほかの散歩」（「映画漫想」）

などの特殊な〈意識の歩行〉を推奨している可能性を指摘した。〈意識の歩行〉とは、〈追憶すること〉、〈見ること〉、〈読むこと〉、〈書くこと〉を通して、対象に自己を没入し、自己離脱することである。さらに、「こほろぎ嬢」における「風」の用例などから、上記の詩における「風」とは、「ものがたり」を読んだときなどに起こる感覚及び心理作用であり、〈意識の歩行〉を誘発するものと解されることを指摘した。本作においては、上記の詩そのものが「私」に「風」を吹き送るものとなっている。すなわち、「私」は九作から教わった詩を読んで感じた悲しみの感覚に、自らの幸田当八への失恋の悲しみを重ね合わせて本作として語り、また、そうして当八との過去を追憶する〈意識の歩行〉を繰り返し行うことで、「おもひ」を「野に捨て」、失恋の悲しみを癒していくと考えられる。

第三章では、「こほろぎ嬢」を翠作品における幻覚小説及び私小説的な作品の一つとして位置づけた。まず、作中の舞台となった図書館のモデルが帝国図書館であることを特定した上で、同館の女性による利用実態を同時代作家のエッセイなどから調査し、「こほろぎ嬢」における図書館利用のあり方と比較した。その結果、「食堂」で勉強する「産婆学の暗記者」の利用のあり方は一般的ではないことが明らかとなった。勉強しているにもかかわらず地下室食堂の「もつとも薄暗い中」にいるとされること、食事をする場で鉛筆を削る非常識な行動、「いつまでも同じポオズ」で動かないことなどからみても、「産婆学の暗記者」には不自然さが見られる。また、「産婆学の暗記者」は、こほろぎ嬢が「粉薬」を服用した後、「話対手」を求める彼女の願望に応じるように出現する。上記の「粉薬」は当時の翠の状況から見て、被害妄想や幻覚などの中毒症状を引き起こすと考えられていたミグレニンと思われる。さらに、「産婆学の暗記者」の機能とその語られ方には、翠作品における幻覚の機能と複数の類似が見られる。「産婆学の暗記者」が幻覚であるならば、彼女の不自然さの謎も解消される。むしろ、その不自然さこそ、彼女が幻覚であることを示唆していたとみられる。「こほろぎ嬢」執筆時、翠は重度の幻覚症状に悩まされていた。翠は自画像として告白的にこほろぎ嬢を描いたと考えられる。

第四章では、「こほろぎ嬢」の語り手「私たち」が「歩行」以降の連作に登場する小野町子と土田九作であり、翠に擬せられたこほろぎ嬢の「分心」共同体として本作を語っている(合作している)ことを指摘した。翠は連作の「企て」として、女性としての自我フィオナ・マクラウドを持つ心理的両性具有の男性詩人ウィリアム・シャープ(前掲しやあぷ／まくろおどの実在のモデル)の執筆方法を、「歩行」以降の作品における語りの構造によって再現しようとしており、本作の「分心」共同体としての語り手も、その一環として採用さ

れたと考えられる。シャープは心が男性の時はシャープとして、心が女性の時はマクラウドとして筆を執ったとされ、それぞれの名前で作品を発表し、二人が「合作」をすることもあったという。執筆行為を通して自身の中にある女性の自我と男性の自我を解放する両性具有の芸術家シャープは、翠の目指す芸術家としての理想のあり方であったと見られる。しかし、翠はただシャープの執筆方法を模倣したのではない。翠は本作において、独自にしやあぷ／まくろおどを恋愛関係に置いた。しやあぷ／まくろおどと九作／町子の関係は、ともに「分心」同士の〈両性具有の恋〉となるが、先行研究が指摘するように、前者は創造主を男性、被造物を女性とする「創造性における男性の優位性」を示すピグマリオンの構造を持つ。しかし、後者は被造物同士の恋であり、そうした構造を持たない。翠は男女それぞれの「分心」をつくり、彼らに恋をさせることで、ピグマリオンの構造を脱構築した〈両性具有の恋〉を提示している。また、本作は、翠の被造物である「私たち」(町子と九作)が、創造主である翠に擬せられたこほろぎ嬢の「ものがたり」を語る。すなわち、作者が作り出した虚構の人物が、逆に実在の作者を語るという、創造主と被造物の権力関係の転覆が起こっている。ここに虚構と現実の関係の問題を読者に提示するメタフィクションとしての、同時代文学を抜きんでた新しさが指摘でき、本作は文学史的にも興味深い一作であると言えよう。

第五章では、九作が〈詩を書ける〉状態は見る対象と同一化する「感情移入」によって引き起こされることを確認し、それが第二章で論じた〈意識の歩行〉による「自己離脱」と同じものであることを指摘した。九作の行う「感情移入」は従来、「物」の「スピリツト」との交流だと考えられてきたが、実際には「物」に移入され、分裂した九作自身の「スピリツト」同士の交流である。九作は外界の「物」や他者に自らの「スピリツト」を移入し、複数化した自分の「スピリツト」(「分心」)と交流することによって詩作を行う。また、九作は「外の風」に吹かれてきたことでも〈詩を書ける〉状態となる。九作の言う「外の風」に吹かれてきたとは、同じく第二章で論じた〈意識の歩行〉を意味すると考えられる。本作で九作を〈意識の歩行〉へと誘う「風」は冒頭に掲げられた心理医者幸田当八の「ノオト」の言葉から受けた感銘であり、本作で九作が行った〈意識の歩行〉とは仮象の松木を作り出し、彼に没入して、「松木日記」を書くことであったと考えられる。「松木日記」は松木の論文のパロディであり、九作は彼を滑稽化することで、日頃の鬱憤を晴らしてもいる。この仮象の松木は、九作の「心によつて築かれた部屋」である「地下室アントン」に、同じく仮象の当八とともに現れる。九作の心が創り出したこの二人は、いわば九作の「ス

ピリツト」が移入された彼の「分心」である。「地下室アントン」は「分心」たちが交流する場であり、それが九作の〈詩を書ける〉境地であったのだろう。自己離脱は自己を複数化、多層化していく営みでもある。このような九作の詩人としてのあり方は、本作の語り手「私たち」のあり方とも重なる。そこには、単一の自我に限定されず、自由に様々な「私」でありたい、という翠の思いが仮託されていよう。しかし、現実世界で複数の自我を持つ者は「分裂病」とされ、排斥されてしまう。シャープが作品の創作を通してマクラウドをこの世に顕現させたように、それは虚構の世界を通してのみ許されることであった。だからこそ、虚構の空間「地下室アントン」を九作は必要とし、それは詩作に結びついているのだろう。そしてそれは、「分心詩人」に憧れ、「分裂心理」を描き続けた翠自身が、何より求めていたものだったと考えられる。

終章では、各章の内容を踏まえながら、上記の連作で一貫して描かれているのは、他者との交流ではなく、分裂した「私」自身との交流であることを指摘した。その上で、尾崎翠にとって〈読むこと〉と〈書くこと〉は、自己離脱を行って「私」を複数化することであり、その複数化した「私たち」(「分心」たち)と交流することであった、と結論付けた。